

センスセンスセンス・オブ・ワンダー

登場人物

三浦優和 みうらゆうが

和田翠花 わだすいか

編集者佐藤・司書・老人（同一人物が演じる）

沙都子・売り子・案内人・司書の後輩・コンビニの店員（同一人物が演じる）

ミセスブックママ

あらすじ

線路沿いのアパートに住む三浦は、電車を通る音で目が覚め、その音が止むと就寝している。三浦は文字起こしの仕事で生計を立てていたが、AIの進化により需要がなくなり、編集者からクビを宣告される。

途方に暮れる三浦をよそに、友人である翠花はいつも通りカードゲームをしにやって来る。託児所付きの仕事をし、シングルマザーとして奮闘する翠花にとって、カードゲームは唯一と言っても良いくらい楽しい趣味の時間だ。

編集者が置いていった出版社のマスケットキャラクターをきっかけに、アパートは少しずつ歪なものになってゆく。

電車の走行音が迫り、窓に電車が到着する、

三浦と翠花はどこか遠い田舎へと、カード探しの旅に出ることとなる。

1 アパートで文字を起こしていると、編集者がやってきて仕事をクビになる

三浦

突然、「センスセンスセンス・オブ・ワンダー」という言葉が頭に浮かんだ。それはSF用語として知ったのかもしれないし、レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』からきているのかもしれないけれど、とにかく脳裏に浮かんだ。自分自身が辞書だとして出典を考えてみたけれど、よくわからなかった。なんとなく、普段の自分とは地続きでなくて、まったく違う文脈から現れた言葉のようにそのときは感じた。

センス、センス、センス。「センス」なんて不確かな言葉を3回も繰り返すなんて、しつこくて無意味だとは思ったのだが。なぜだろうか。

光っている、と感じる。

なんか、光ってるなー。

そう思っていたら、またすぐそばを電車が通って我に返った。

電車が通る音。

そこは線路の近くにあるアパートである。かなりの頻度で電車が通過し、車走音が部屋中に響いてくる。そのたびアパートも少し揺れる。三浦優和は録音された音源を聞いている。目の前にはパソコンが置かれている。

音源

ええっと、つまり、どうして戦争が始まったのかっていうと、その理由はもう、かなり明らかなんですけれども、ええ。(相槌 なるほど) 農耕が始まって、人々が土地に価値を見出すようになったっていう。そこからですね。

三浦は音源を止める。

三浦

つまり、どうして戦争が始まったのかっていうと、その理由はもうかなり明らかなんですけれども、ええ。改行。なるほど。改行。農耕が始まって、人々が、

三浦は音源の内容を打ち続けている。打ち終わると、また音源を再生させる。

音源

そこに肥料や種を投資して、それを収穫する、で、定住をする、その利益を得るために定住をする。(相槌 ああ)。

音源を止めて打ち込む。また再生する。

音源 その結果、食料が増えて、人口も増えて、領土を拡大しなくちゃならなくて、

音源を止めて打ち込む。また再生する。

音源 そう、えーですから、所有という概念が定着した時点で、その、それを保持する必

要が生まれ、隣接する集団との摩擦が不可避になって、

音源の最中に電車が通る。三浦は音源を止める。窓を開けると、さらに大きな音がして近くを電車が通り過ぎてゆくのがわかる。三浦はそのままじっと、電車が通り過ぎるのを待つ。静かになってから、音源を巻き戻し続きを打つ。

音源 そう、えーですから、所有という概念が定着した時点で、その、それを保持する必

要が生まれ、隣接する集団との摩擦が不可避になって、やがて、その保全や拡大を担う武力の専門階層ですね、それが形成され、それが戦争の制度化を促した。こうした流れを踏まえると、戦争というのは、意外にも人類史の中では比較的新しい現象だと言えるんですけれども

三浦は打ち込みをせず、ぼうっと聞いている。と、携帯電話が鳴る。三浦はしばらく気付かず、急に目が覚めたようになり、慌てて電話をとる。

三浦 あ、はい。三浦です。はい、ああ、元気です。あ、今ですか。はい。大丈夫です。

……どうしました？ あ、大丈夫です。家……あ、はい、そこです。では、はい待っています。あ、お茶とか出せるもの何もないんですけど。すみません。はい、じゃあ。すみません。

三浦が電話を切る。電車が通る。三浦は窓を閉めに行く。電車の騒音が小さくなり、やがて消えていく。と、また電話がかかってくる。

三浦 あ、もしもし。え？ ああ、これから人来るから。うん、いや、そんな時間かから

ないって話で、5分くらいって。いや仕事先の人。ああ、それくらいの時間なら大丈夫だと思う。ありがとう。あ、いいの？ ピノ？ いや嬉しい。うん、あとで。

電話が切れる。

三浦はパソコンをスリープ状態にし、閉じる。じっと座っている。

インターフォンが鳴る。三浦、ドアを開けに行く。

三浦 あ、こんにちは。

佐藤 こんにちは。ごめんね急で。

三浦 いやいや、大丈夫です。

佐藤 近くに先生の家があつて寄らせていただいたんだけど、そういえば三浦くんの家もこの辺りだったと思つて。

三浦 いやいや、ありがとうございます。

佐藤 これ、お土産に。

三浦 ああ、嬉しいです。あ、お茶っばですか。

佐藤 そう。水出し。

三浦 ああ、ありがとうございます。

佐藤 最近暑いからね。

電車が通り過ぎる。

佐藤 電車近いよね。

三浦 線路が、はい。

佐藤 うるさくないの？

三浦 あー……嫌いじゃないです。

佐藤 へえ、そっか。

三浦 なんか、

佐藤 え？

三浦 終電終わったら、もう聞こえないじゃないですか。この音。そしたら、ああ、もう僕は寝ていいんだなつて思います。

佐藤 へえ。あ、じゃあ朝起こされるでしょ。

三浦 はい。なんでそれは、もう起きる時間なんだなつて。僕なんか早起きしても意味ないですけど、そもそも長時間寝れないタイプなんで、まあちようどいいかなつて。犬とか飼えたら散歩行くんですけどね。

佐藤 ……よく喋るね。

三浦 そうですか？

佐藤 今までで一番よく喋る。

三浦 ああ、なんかわからないですけど。すみません。

問

佐藤 話があつて。
三浦 ああ。あ、お茶となくて、水もすみません、水道水しかなくて今。本当にごめん
なさい。
佐藤 持ってきてる。あ、三浦くんは何か飲まなくて大丈夫？
三浦 僕、大丈夫です。あんまり飲まないですよ。
佐藤 ああ。水出しでごめんね。
三浦 いやいや、とんでもないです。
佐藤 話なんだけど。
三浦 はい。
佐藤 あ、そう話があつてね。
三浦 それは、はい。
佐藤 いつもすごく頑張ってくれてるからさ。申し訳ないんだけど。
三浦 はい。
佐藤 さすがにもう無理だよな。
三浦 ああ。いや、ですよな。
佐藤 もちろん三浦くんにやつてもらった方がケバ処理も正確だし。だけど、今の時代文
字起こし……無理だよな。
三浦 ですよな。
佐藤 予算の話といえばそうなんだよ。今さすがにそこに割けないというか。AIあるし。
三浦 いや、めっちゃわかります。
佐藤 収入源ってこれだったの？
三浦 えっと、まあ。
佐藤 そうか……。
三浦 はい、いや、大丈夫です。
佐藤 あと2件くらいあるから、それはやつてもらいたい。
三浦 あ、はい。
佐藤 メールするね。
三浦 はい、待ってます。
佐藤 電話でもいいかなって思ったんだけど、こういう話は直接した方がね。
三浦 はい、とても、ありがたいです。
佐藤 うん。急ぎでごめんねこの後打ち合わせがあつて。
三浦 はい、全然。
佐藤 あ、そうだ、これいる？

佐藤、自身のカバンからキャラクターのクリアファイルを渡す。

三浦 あ、可愛いっすね。
佐藤 うちの会社のイメージキャラクター、リニューアルしたんだ。
三浦 あ、へえ。
佐藤 ミセスブックママ。
三浦 ミセスブックママ。
佐藤 マスコットもあるんだよ。これもあげる。

鞆からぬいぐるみを取り出す。

三浦 ああ、可愛いですね。ありがとうございます。

三浦、近くの本棚の上に飾る。

佐藤 そう言ってもらえて嬉しいよ、僕主体の企画だったから。
三浦 あ、へえ！ すごい。はい。いや、もうほんと。
佐藤 まあ、たいしたことないんだけどね。よし、じゃあ、クーラーつけなね。
三浦 あ、暑かったですよ。
佐藤 僕はいいけど、三浦くん熱中症になっちゃうよ。
三浦 あー、まあ結構体強いんで。でもそうっすね、気を付けます。
佐藤 うん。じゃあまたね。あ、
三浦 なんですか？
佐藤 やっぱり社会って厳しいよね。
三浦 え？
佐藤 うち、君みたいな若い子ももちろん働いてるけど、なんかちよつと、なんだろうね。
三浦 え、あ、ああ。
佐藤 仕事って自分で考えてどんどん課題にコミットして行って、責任持てるようになるから楽しいと思うんだけど。そのためにどれだけ無駄な時間を省けるのか。時間や体力を注げるのか。そんなこと若いうちにしかできないんだよ。ねえどう思う？
三浦 世代が違うの？ 若い人の価値観ってどんな？
佐藤 いや、僕そんなに若くないですけど。
三浦 そう？ そうか。
三浦 はい。
佐藤 ……暑いな。
三浦 はい。
佐藤 うん、じゃあ、何かあったら連絡するからさ、元気で。引き続きよろしくね。
三浦 あ、はい。

三浦、玄関まで送る。佐藤、出て行く。

三浦、見送ったあとドアを閉める。

三浦、床にしゃがみ込む。と、電車が通る。顔を上げる。そのまま窓の方を見ている。

三浦、ミセスブックママを見る。手に取って、投げようとするが、ためらって少し転がす。ほんの少し日が落ちる。

2、友達、和田翠花がカードを見せにやって来る、ついでにピノを食べる

ドアが半開きになる。和田翠花が顔を覗かせる。パートの制服を着ている。

翠花 ごめんくださいーい。

三浦 あ。

翠花 優和くん。

三浦 あ、

翠花 入って大丈夫？

三浦 ああ。大丈夫です。ああ、ごめん。

翠花 お邪魔します。仕事してたの？

三浦 うん。

翠花 (パソコンを見て) 文字起こし？

三浦 うん。

翠花 本当珍しい仕事だよね。

三浦 そうね。

翠花 楽しいの？

三浦 それなりに。

翠花 いいじゃん。邪魔してごめんね。

三浦 いや、いい休憩になる。

翠花 よかったありがとう。ほい、ピノ。

三浦 うん。ありがとう。

翠花 今食べる？

三浦 うん。

翠花 暑いねー。美味しいよ、こんなあつついとこで食べたら。

三浦 そうだよね。あつついよね。

翠花 はい、どうぞ。

翠花、ピノを渡す。

三浦 翠花さんの分は？

翠花 2個ちょうだい。

三浦 うん。

翠花 4個食べていいよ。

三浦 うん。

翠花 ちょっとだけ食べたかったんだよね。

2人はピノを分け合って食べる。

三浦 仕事は？

翠花 今日の分は終わったよ。

三浦 早いね。

翠花 サボってるわけじゃないよ。配り終わって時間が余ったから。

三浦 サボってるなんて思っていないよ。

翠花 必死で乳酸菌売ってるの。「いかがですかー？ 新発売のお品物でー」

三浦 あはは。

翠花 頭の中では、バトルしてえ！ とか思いながら。

電車が通る。2人は窓を見る。

三浦 保育所は何時お迎えだっけ？

翠花 あと30分くらいかな。

三浦 そうか。

翠花 持ってきたよ。(カードを取り出す)

三浦 そうだと思った。

翠花 楽しみだな。早くデッキ見せたかった。

三浦 うん。

翠花 結構苦労したの。

三浦 高かった？

翠花 いや、お金はかけてないよ。ほぼ中古の20円コーナーで選んだからね。みて、これ。

三浦 なにそれ。

翠花 乳酸菌をテーマにデッキ組んだ。

三浦 まじ？

翠花 モンスターも菌っぽいビジュアルばっか集めたし。あと全体的に色をベージュ系でまとめてみた。

三浦 すごい。

翠花 回すから見えてみて。

シャッフルを始める翠花。すると手を止めて、

翠花 やって。

三浦 ええ？ うん。いいよ。

三浦、器用にシャッフルをする。

翠花 さすが。

三浦 これくらいできないと大会出られないよ。

翠花 出てないくせに。

三浦 まあね。

翠花 人見知り？

三浦 かもね。

翠花 もしかして元気ない？

三浦 いや？

翠花 そうか。

三浦 なんで。

翠花 むしろ元気そうだから聞いてみた。

三浦 はは。

翠花 人見知りなのに人の声文字に起こしてるんでしょ？

三浦 そうだね。

翠花 何が面白いの？

三浦 うーん、そうだね。なんか、「えーっと」とか言ってるところ。

翠花 そこ！？

三浦 あと、都合よく編集されてないところ。

翠花 ああ、生の声的な。

三浦 そう。

翠花 ふうん。

三浦 翠花さんは？ 元気？

翠花 足が痛い（笑）歩きすぎだね。

三浦 まあ肉体労働ではあるのか。

翠花 何も考えないで良いからそこは良いけどね。保育所ついてるし。

三浦 うんうん。

問

三浦 いやあ、乳酸菌かあ。

翠花 すごいでしょ？

三浦 執念。

翠花 そんな言い方やめてよ(笑)
三浦 ごめん(笑) 混ざったと思う。

三浦 カードを翠花に手渡す。受け取ろうと手を伸ばすと、翠花は目線の先にミセスブックママを見つける。

翠花 うわ。

三浦 え？

翠花 ぬいぐるみか。こっち見てるみたいだったわ。

三浦 ああ、仕事くれてる会社のマスコットキャラクター？

翠花 へえ。なんか怖くない？

三浦 そう？

翠花 悲しそうじゃない？

三浦 え、そう？

翠花 なんか。

三浦 ミセスブックママって言うんだって。

翠花 へえ。

三浦 りいちゃんにどう？

翠花 知らないよ。りいの趣味じゃないっていうか、あの子恐竜やモンスターが好きだから。だいたい本読むママとか、母性求められてるみたいで気が引けるわ。ああいうの、おっさんが企画してるんでしょ？

三浦 うん、まあどうだかわからないけど。

三浦 ミセスブックママをつい見てしまう。

翠花、そんな三浦に気付く。

三浦も翠花の視線が自分にあることに気付く。

三浦 回してみてよ。

翠花 うん。

翠花、三浦ほど器用にはないが、手際よく山札からカードを取り出し机の上に並べていく。ゲームルールに沿って、カードを引いていく。

三浦 ああ、なるほど。

翠花 そう、やっぱり防御を強化する方にシフトしているかと思って、このデッキは。

三浦 前は攻撃重視だったけど。

翠花　で、守りを強くするためにアイテムの方を増やしたんだよね。あとは攻撃力の高いモンスターじゃなくて、特性の強いモンスターにしたくてさ。進化させなくても使えるから初手から強気でいけるし。

三浦　作戦としては良いと思う。最近発売されたデッキの傾向として、進化されると相手のペースになって勝ちづらくなっちゃうから、その前に潰さないとね。いや、乳酸菌という縛りがあるにも関わらず過不足ないね。

あとは特殊魔法系のカードをもう少し入れられれば。

翠花　わああ、そうだよね！　同じこと思ってた。

三浦　新しいパックに魔法系結構入ってるらしいよ。

翠花　本当？

三浦　でもレアカード？　手に入れるのは厳しそう。

翠花　悔しいな。そういう点ではお金ある人たちが有利。

三浦　争奪戦だね。でも俺たちは頭を使おう。

翠花　うん、工夫して最小限のマナーで勝ちに行く。

電車が通る。

翠花　一戦しなかったけど、りを迎えに行かないと。ありがとう。デッキ見てもらえてよかったわ。

三浦　うん。かなり出来の良いデッキだったと思う。

翠花　じゃあね。あ、待って。

翠花、鞆からお茶を出す。

翠花　ほら、これ乳酸菌入りお茶。新製品。

三浦　ああ、いいの？

翠花　あなた麦茶パックとかあっても作らないでしょ？　支給します。

三浦　はは。ありがとう。

翠花　このお茶いいんだよ。

三浦　健康効果？

翠花　もちろんそうだけでも一個あって。

三浦　なに？

翠花　パッケージ見て。

三浦　え？

翠花　俳句が書いてあるでしょ？

三浦　ああ。そういうタイプの。

翠花 読んでみて。

三浦 「光さす 電車の窓から 千の夢」ああ、乳酸菌が千個だから。

翠花 普通に考えたら電車乗ってるだけなだけさ、なんかこれ見たときに、ああ、君ん家みたいで面白いなあって。

三浦 ああ、うち？

翠花 まじでただのアパートなんだけさ、

三浦 あ、ごめん。

翠花 でもさ、めっちゃ電車の音がして、

三浦 うん。

翠花 通ってるのか乗ってるのかホームなのか、目とかつむったらもうわけわかんない気持ちになるよ。

三浦 たしかに。

翠花 それで、ああ、どっか行ける気がするなって。

三浦 いつも、どこも行かないのね。

翠花 そう、どこも行かないんだよ。だから気分だけでもどっかに飛ばそうよって。なるほど。

三浦 つむってみる？

三浦 ああ。

ふたり、目をつむる。電車の音の名残、軽い振動を感じる。

三浦 振り落とされそうだな、電車の外側に。

翠花 (笑って) 外にしがみついている設定？ 中入ろうよ。

三浦 そんな資格あるだろうか。

翠花 いやいや、そこは想像で。

三浦 ああ、うん。

翠花 できた？

三浦 いまいち。

翠花 そんなんじやりに怒られるな。

三浦 はは。

問

翠花 じゃ、また近々一戦を。

三浦 うん。

出ていく翠花。
それを目で追う三浦。

3、ミセスブックママがぬいぐるみを回収しにやって来る

三浦、お茶を少し飲み、転がったままのミセスブックママをじっと見る。手に取り、本棚の上に戻す。棚から自分のデッキを取り出して、少しシャッフルする。デッキをまた棚の上に置き、今度は本棚にある本に目を留める。

三浦 『センス・オブ・ワンダー』

本を手に取りめくる。あるページで手を止める。しばらく読んでいると、ごく小さい声ではあるがだんだんと音読し始める。

三浦 「地球の美しさと神秘を感じとれる人は、科学者であろうとなかろうと、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけっしてないでしょう」

三浦 はは。

かすかに風が吹いてくる。窓は開けていないのに。

三浦 「たとえ生活の中で苦しみや心配事にあつたとしても、かならずや、内面的な満足感と、生きていることへの新たな喜びへ通ずる小道を見つけだすことができる」と信じます」

三浦 「地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力をたもちつづけることができるでしょう」
はいはい。

「鳥の渡り、潮の満ち干、春を待つ固い蕾のなかには、それ自体の美しさと同時に、象徴的な美と神秘がかくされています」

三浦、本を放り出すと寝転がり、目をつむって伸びをする。すると、ひとりでにゅつくりと窓が開き、時間が倒錯していく。日が早いスピードで落ちているような、朝日が昇っているような、不思議な感覚になる。

三浦 「自然がくりかえすリフレイン——夜の次に朝がきて、冬が去れば春になるという確かさ——のなかには、かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです」

三浦 ああ、暑い……。

三浦、熱さでぼうっとしてくる。熱中症のような症状。

ミセス、どこからともなく現れる。窓かもしれないし、本棚かもしれないし、普通に玄関からかもしれない。本を手に取る。

ミセス 「自然が繰り返すリフレイン——夜の次に朝がきて、冬が去れば春が来るという確かさ——のなかには、かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです」

うーん、いい言葉。今、何時？

ミセスは自分の人形を拾いに行く。と、手に持つ。

三浦、寝ぼけながら、

三浦 わからない。

ミセス そっか。どうにでも見えるけど。

三浦 電車は走ってる？

ミセス 走ってると思う。

三浦 そしたら、朝5時から夜12時くらいまでのどこかの時間だと思う。

ミセス やたら長いのね。

三浦 (彼女が部屋にいることに気づき) どういうこと？

ミセス 窓も玄関もあいてるから。でも仕方なく入ったの。

三浦 はい？

ミセス この人形をとり。

三浦 どうして？

ミセス ちょっと不備があったの。私を人形にしたものなんだけど、不備が恥ずかしいから回収してるのいちいち。

三浦 じゃあ君は。

ミセス ミセスブックママです。名前は気に入ってないんだけど。

三浦 気に入ってないの？

ミセス むしろ最悪の名前だと思ってる、結婚してないから。

三浦 結婚してないの？

ミセス したくないし、相手もないから。だけど、出版社の事情で。子供に読み聞かせをするお母さんの設定が良いって言われて。そんなこと言われたら仕方ないじゃない？ やるしかないなって。まあ、そういう仕事なの、やるしかないという。

三浦 仕事なら仕方がないね。

ミセス これ(ぬいぐるみ)、ちょっともらっていくね。あとで返すから。
三浦 返してくれるの？

ミセス いらない？

三浦 いや、うん、じゃあ、お願いしようかな。

ミセス うん。あ、窓閉めない方が良さよ。

三浦 うん、え、なんで？

ミセス 熱が籠るし。それに不備を直したあと、戻せないでしょう？

三浦 ここに戻ってくるんだ、わかった。

ミセス ここじゃない場合もあるけど。とにかく他もあるから急ぐね。

三浦 うん、ごめん。

ミセス では。あ、さっきの本の話、とっても良いと思う。

三浦 え？ ああ、『センス・オブ・ワンダー』。いや、俺にはちょっとわかんないな。い
いこと言ってるのはわかるけど。

ミセス それは君が経験不足だから。

三浦 経験不足？ ああ、まあそれはそうかもしれないけど。

ミセス 経験不足はなにで補うか知ってる？

三浦 いや？

ミセス 想像力。じゃね。

三浦 いや……あなた誰？

風が吹く中、ぬいぐるみを連れたミセスが帰っていく。

4、翠花、三浦をある休暇に誘う。三浦の妹までやって来る。

三浦の電話が鳴る。暑さからぼうっとしつつ、出る。と、音源を再生していたレコーダーから翠花の言葉が聞こえてくる。

翠花 もしもし、優和くん？

三浦 あ、どうしたの？

翠花 今日さ、ばあちゃんが急ぎよ来てくれることになって。りいをみてくれるんだけど。

三浦 ああ、そうなんだ。

翠花 だから、どこか遊びに行つて良いって言われてさあ。色々やりたいことは浮かんで。

やあ、久しぶりだからね。美容院も行きたいし、お酒？ 飲むのもいつかなくて、まあほんとに色々思ったんだけど。

三浦 うん。

翠花 今からそっち行つていいかな。

三浦 ああ、うん。

翠花 あれ、なんか用事ある？

三浦 いやいいよ。え、飲みに行くの？

翠花 いや、もうちよつと遠く。

三浦 え？ 遠く？

翠花 じゃあ後ほど。

三浦、電話を切る、とレコーダーからぶつりと音がする。Bluetoothで繋げていたのかと三浦は機器を確認するが、答えは出ない。

と、今度は三浦の妹の沙都子がやってくる。沙都子とはずいぶん会っていない。甘そうな海外製のお菓子をたまにつまんでいる。

沙都子 よ！

三浦 え、あれ？

沙都子 やほやほ。

三浦 え……沙都子？

沙都子 おひさ。

三浦 え、アメリカじゃなかったの？

沙都子 ちよつぱり帰ってきてるんだよ。

三浦 ははは。びっくりした。え、どうしたの？

沙都子 お母さんは？

三浦 いや、別にそんなに連絡とってないっていうか。

沙都子 そっか。一緒に住んでないのか。

三浦 かなり、とっくに。

沙都子 ああ、へえ。

三浦 え、ほんとに？

沙都子 え？

三浦 いや。

沙都子 私今ね、アメリカの大学図書館で働いてるんだー。

三浦 え、すごいじゃん。

沙都子 バイトー。座ってるだけでいいんだよ、本借りにきた人の対応するだけ。めちゃいいよ。その間に大量に本読めるし。

三浦 英語喋れるのか。それはそうだよね。

沙都子 めちゃくちゃ喋れるよ。

三浦 じゃあ、英語で

沙都子 (食って)あとさ、近くに山があってね、散策もできるの。

三浦 あ、へえ、山。

沙都子 美味しい空気いっぱい吸って。気持ちいいよ。

三浦 うん、その、あんまり、

沙都子 あ、やばい。短時間でめちゃくちゃ友達に会わなきゃいけないんだよね。ばいばい。

三浦 あ、そうなんだ。え、次いつ帰ってくるの？

沙都子 わからないよ。お母さんによるしくね。

三浦 いや、あ、うん。母さんのところは行かないの？

沙都子 検討中。欲しいお土産ある？

三浦 いや、そういう、甘い以外で。

沙都子 なに？ つまんないー。

三浦

沙都子

三浦 姿を消す。三浦、呆気にとられている。

三浦の携帯が鳴り、出る。と、今度は本棚にあった別のレコーダーから音声が聞こえる。

三浦

沙都子

三浦

佐藤 三浦くん！？ さっきはありがとう。

三浦 いえいえ、どうかしましたか？

佐藤 急ぎで仕事いいかな？

三浦 あ、はい。

佐藤 新たな音源なんだけど。

三浦 あ、はいわかりました、問題ないです。え、これってさっき言った最後の二つですか？

佐藤 ああ、そう、そのうちの一つ。

三浦 そうですか。急ぎですね。

佐藤 うん。

三浦 いつまでですか？

佐藤 今日か、明日か、とにかく早いとありがたいんだけど。

三浦 わかりました。あ、量は？ いや、今日イレギュラーがいっぱいあって……

佐藤 100分くらいかな。量はたいしたことないんだけど、音飛び気味で。

三浦 ああ、承知しました。

佐藤 メールですぐ送るからさ。今ちよつとバタバタしてるんだよ。飛んじやったアシスタントがいて。

三浦 あ、はい。

佐藤 そんなにケバ処理正確じゃなくていいからね。

三浦 あ、はい、時間最優先で。

佐藤 助かるよ、じゃあまた。

電話を切る、と、レコーダーからぶつりと音がして切れる。
身支度をはじめ。

三浦 ええと、なんだっけ。仕事と、あと翠花さん。だから、ああ、出かけるのか。

乳酸菌入りお茶をリュックに入れる。

三浦 パソコン。レコーダー。財布。

次々とリュックの中に物をしまう。デッキも入れる。

と、窓が目に入る。閉めようとするが、ふと先のミセスブックママとの会話が脳裏に浮かぶ。窓を閉める手を止める。

三浦 本。

『センス・オブ・ワンダー』をリュックにいれる。

インターフォンが鳴る。と、翠花がやって来る。

翠花　ごめんくださいーい！　思ったより早く着いちゃった。大丈夫？

アパートの扉が開き、翠花が入ってくる。パートの制服とシルエットは変わらないが、遠
出用にマイナーチェンジしている。

三浦　あ、うん。

翠花　きつと一緒に行ってくれると思って、実は近くまで来てたんだ。

三浦　えっと、どこに、

翠花　あのさ、カード買いに行かない！？

三浦　カード？

翠花　新発売のパック！

三浦　ああ。あれってもう売り切れてるんじゃないっけ？

翠花　売ってるとこ見つけたの。

三浦　おお、ほんと？

翠花　うん。

三浦　どこ？

翠花　コンビニ。

三浦　コンビニ。

翠花　それが面白い話なんだけど。

三浦　うん。

翠花　入荷したその日に従業員みんな風邪になって、店閉めてたらしい。

三浦　あー、え、今日オープンってこと？

翠花　そう。すぐく田舎のコンビニなんだけどね。

三浦　そんなことあるんだ。どこ情報？　それ。

翠花　なかったらなかったでいいの。可能性があるなら。

三浦　うん。あー、ちよつと待って。

翠花　どうしたの？

三浦　暑い……。

翠花　やばいじゃん。

三浦　その、それって何で行くの？

翠花　電車。

三浦　電車。涼しいかな。

翠花　涼しいでしょ。お茶飲んで。

三浦　田舎ってことは、え、本数少ないよね帰ってこられるかな。

翠花　田舎だからね。まあ大丈夫。明日祝日だし。

三浦　祝日だっけ。

翠花 堅気じゃないからわからないんだ。

三浦 曜日感覚はないな。何の日？

翠花 何を祝う日か？ なんだっけ。あ、そろそろ電車乗らなきゃ。

三浦 うちからだど、何線？

翠花 もうすぐ到着すると思うんだけど。

三浦 じゃあ急がなきゃ。

翠花 うん。

三浦 あ、そういえば少し仕事があつて、荷物の確認を、

電車の音が近づいてくる。だんだんと轟音になってくる。三浦の声を少しかき消す。

翠花 え？ なんて？

三浦 いや、(音に気を取られて)

翠花 あー、窓あけっぱじゃん。

三浦 いやそうだよ、こうしろって言われて。

翠花 え？ なんて？

強い光が窓から入ってくる。ふたりはそれに照らされる。

翠花 うるさくない？

三浦 うん、いつもよりなんか。

翠花 爆速で走ってんのかな。

また走行音が大きくなる。

翠花 また目瞑る？

三浦 え？

翠花 より振り落とされる感味わかるかも。

三浦 ああ。

翠花 あとね、困ったときは一度目を瞑るんだよ。すると新しい世界がやってくるって。

三浦 え？

翠花 りいが言ってた。

三浦 子どもはすごいな。

翠花 やってみよ。

ふたり、目を瞑る。と、電車が停止した音。

翠花　もしかして停車した？

三浦　うん。

翠花　目、開けてみる？

三浦　うんそうしよう。

目を開ける。光がふたりを照らしている。

三浦　これって、電車だよね？

翠花　うん、鈍行だと思う。

三浦　涼しいかな。

翠花　めっちゃ涼しいと思う。

窓から電車に乗り込む。

5、鈍行列車の景色はみるみる変わる

三浦と翠花、電車に乗り込んでいる。

電車の走行音がかすかに鳴っている。外からは、先ほどより白みがかった陽の光が感じられる。車内は涼しそうである。

三浦は膝の上にパソコンを置いて構えている。佐藤からのメールを待ち受けているようだ。

三浦 ……これはどちらの方角に進んでいるのだろう。

翠花 東の田舎か、西の田舎かってこと？

三浦 そうなるね。

翠花 どっちだろうね。

三浦 知らないの？

翠花 東京23区から見て東村山って西にあるじゃん？

三浦 ごめん、聞いたのが悪かった。

翠花、窓の向こうを眺める。

翠花 こういふときってあつという間に列車が進んですぐ目的地につけるような気がするけれど、

三浦 うん。

翠花 鈍行だもんね。

三浦 そのコンビニって24時間だよな？

翠花 あ、調べてない。

三浦 行ってみてやってないなんてことあるかな？

翠花 あるかもしれない。

三浦 そのときはどうする？

翠花 コンビニの前で待とうよ。

三浦 朝まで？

翠花 そう、開店するまで。

三浦 ……駅から近いの？

翠花 たぶん。

三浦 (少し後悔する)

別の車両からか、売り子がやって来る。

売り子 いかげすかー。

翠花 あ、何か買えるかな？

三浦 買おう。コンビニやってるかわからないし。

翠花 鈍行なのに売り子がいるんだね。すみませーん！

売り子 なんすか？

翠花 あ、いや。

売り子 お菓子つすか？

翠花 あ、はい。

売り子 (カバンの中身を見せる)

翠花 ……もしかして乳酸菌入りの飲料とかも売ってます？

売り子 あーあ(カバンの中をチラりとみる)、ないすね。

翠花 そっか。

売り子 あ、いや、これすか？

売り子、子供向けの飲料を見せる。

翠花 ああ、うちのメーカーじゃないな。

売り子 あ、違いました？

三浦、子ども向け飲料を見ている。

翠花 いや、それふたつください。それとお菓子。いいよね？

三浦 うん。あ、出すよ。

翠花 後で精算するから。あ、お菓子しかないですか？

売り子 お菓子しかないですね。

翠花 はあい。

売り子 はあい。

翠花、お金を払い飲料とお菓子を受け取り、三浦にも手渡す。

翠花 のも。

三浦 あ、うん。

翠花と三浦、バック飲料を開ける。

売り子、去る。三浦、売り子を目で追う。

ふたり、パック飲料を飲む。

翠花 りいってさ、甘いものばかり欲しがるわけ。

三浦 ああ。

翠花 偏食だからさ、ひどいもんだよ。ドーナツとかあげてるんだけどね、もう食べてくれるだけましって感じで。どうしたらいいと思う？ あ、優和くん偏食だった？

三浦 いや、俺はあんまり好き嫌いなく。

翠花 ふうん。

三浦 妹がいて。

翠花 あ、そうなんだ。何歳？

三浦 3つ下で。

翠花 へえ。

三浦 偏食だったけど、頭良かったよ。運動もできたし。

翠花 ああ、そうなんだ。

三浦 だから子どもときもの食べれないとかは、問題ないかなって個人的には。

翠花 ふうん。そうなのかな？

三浦 うん。

翠花 好き嫌いしないで食べられるようにならないと、彼女生きていけないかもしれないって思うんだよね。

三浦 うん。

翠花 だけど、これは変なあれなんだけど、ずっとわがままでいてほしいとも思う。

三浦 うん。

翠花 大きな声でわがまを言えるたくましい子のままでいて欲しいなって。

三浦 ああ、うん。

パック飲料を飲み終わるふたり。

案内人がやって来て、何やら準備を始める。

案内人、寝台列車のような空間を作る。

ふたり、その様子を見ている。

三浦 あ、メール来た。

翠花 メール？

三浦 うん、ごめんちょっと仕事しなきゃ。

翠花 ああ、仕事あったんだ。

三浦 うん。ごめん、ちょっと。そうだな、あっちでやってこようかな。

三浦、少し離れたところを指差す。

翠花 うん。私デッキ見てようかな。

三浦 うん。あ、

翠花 どうしたの？

三浦 イヤホン忘れた。

翠花 ああ。

三浦 どうしよう。

翠花 聞かないようにすればいい？

三浦 あ、うん。ありがとう。

と、ミセスブックママがやって来るがふたりは気が付かない。腰掛けている。

翠花 あ、見て。

三浦 なに？

翠花 外の景色、森じゃん。

三浦 ああ、本当だ。

案内人 窓、開けてみますか？

翠花 あ、いいですか。

案内人 いいですよ。

案内人、窓を開ける。と、風が吹いてくる。

翠花 おお風！ 良い匂い。

三浦 うん。

翠花 昔ね、家族でよくドライブしたの。私は後部座席に座って。まだ子どもだった。緑の山道を抜けるまでにね、グネグネ曲がったり、小石を乗り越えたりするから、そうとう揺れて、よく吐いていた。

三浦 ああ。

翠花 だけど空気は美味しいんだよね。吐くとね、助手席の方が遠くが見られて酔えないからって前に座らせてくれたの、父が。

三浦 ああ、お父さん。

翠花 目を細めて、景色しか見えないうようにしてさ。すると、緑の中に自分だけがぐんぐん入っていくような気になってとても楽しかった。そして酔いを我慢して我慢して視界が開けると、海が広がってるの。

三浦 海。

翠花 そういえば、りいはまだ海に連れてきたことないな。

三浦 そうなんだ。

翠花 りいに悪いなあ。……海に連れてつもらったことはある？

三浦 子どもの頃？ ある、あるよ。ある時期まではしょっちゅう。

翠花 そういうのって思い出になるよね。

三浦 適性によるんじゃないかな。

翠花 適性？

三浦 怖くて仕方ない、と思ったこともある。

翠花 海が？

三浦 うーん、そういったものが。

また強い風が窓から吹いてくる。

案内人 すみません、風思ったより強かったんで、閉めてもいいですか？

翠花 大丈夫です、すみません。

三浦 ありがとうございます。

案内人、窓を閉める。

三浦、振り切るように場所を移り仕事の準備をする。

案内人、仕事をしているようではあるが、三浦たちのことを気にしている。

ミセス、こっそりと外を見ている。

三浦、パソコンを開き、音声ファイルを開く。と、レコーダーから音源が流れる。

音源

いやはや、ですからね、人生はあまりにも早く積み重なってしまふものですから、ええ。はい。けれどもですね、現状から見ればこれは大いにメラニコリニックな状況に違いはありません。もし大きな眼で人間たちの目を見、自分の考えを述べるのなら、どうやってメラニコリーを避けることができましょうか。とはいえ希望を失うことには賛成しません。たとえこのような、世界にまた戦争が蔓延る状況だとしてもですね。曰く、戦争というのは経済活動なんですよ。「遊び」や「祭り」はその逆を行います。それは利益と全く対をなしてるんですね。ジョルジュ・バタイユがいうところの……

音声を聴きながら、三浦はそれを書き写している。

カードをシャッフルしていた翠花もいつの間にか音声に夢中になっている。

三浦は文字を打ち続け、仕事に夢中になっている。

いつの間にかあたりはすっかり暗くなっている。

ミセス 「自然がくりかえすリフレイン——夜の次に朝がきて、冬が去れば春になるという確かさ——のなかには、かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです」

でも、物語がその癒しを増幅させる作用を持つのだとしたら？ たくさんの夜と朝を繰り返すことによって、その力が何倍にもなるのだとしたら？ その分あつという間に老けてしまう気もするけれど。あーあ、不備が直せないまま夜が来て朝が来ちゃう。

佐藤がミセスの元へやってくる。

佐藤 あ、いた。

ミセス あ、佐藤さん。

佐藤 ちょっと、困るよ。

ミセス そんな仕事ばかりできませんって。

両者睨み合う。と、アナウンスがかかってくる。

音声 夜になりました。展望車へ行きましょう。空には広くまたたく星の海が広がっています。展望車から美しい銀河を、眺めてみましょう。

6、案内人の星案内

皆、案内人の後をついて出てくる。佐藤もひっそりと。

案内人 みなさん、眠りにつく前に少しだけお話をお聞かせしたいと思います。大丈夫ですか？

三浦 大丈夫です。

翠花 大丈夫です。

ミセス (うなづく)

案内人、手には星座早見盤とコンパスを持っている。

案内人 こうして、星座早見盤を、星空に向かって掲げます。早見盤はみなさん使ったことはありませんか？

一同、首をかしげる。

案内人 これは大変便利なもので、まずこうやって日付と時間を円盤の目盛り上で「今」に合わせるんです。それで、見たい星空の方を向いて、円盤をその方角に合わせてから、掲げますよ。ほら。

案内人、円盤と星空を交互に見ながら、片目で見たり両目で見たり、忙しくしている。一同、早見表は持っていないが両手を空に向け、案内人の真似をする。

案内人 その調子です。

一同、うなづく。

案内人 ね、今の空にどんな星が浮かんでるか、わかるでしょ？ 見つけられましたか？

翠花 きりん座、はと座、いっかくじゅう座。

三浦 やまねこ座、りゅう座、くじら座。

案内人 あら、春と夏と秋と冬の星座が混ざっちゃってますよ。めちゃくちゃじゃないですか。

ミセス みなみじゅう座、ぼうえんきょう座、テーブルさん座。

案内人 それは南半球の星座ですよ。どうしちゃったんですか。

一同、首を振る。

案内人 まあ、仕方がないですね。そういう日もあります。じゃあ、いろいろ混ざっちゃった星空を見ながら、星座のお話をしますね。少しだけです。たくさん話すと眠くなっちゃいますから。

星座が誕生したのは、紀元前3000年頃で、今から5000年ほど前なんです。さかんに農業が行われていたメソポタミア文明で、季節の移り変わりを知らするために生まれたのが黄道十二星座。太陽の通り道を結んでできた線上にある12個の星座です。あなた、何月何日生まれですか？

ミセス 3月15日。

案内人 じゃあ、魚座ですね。

ミセス、うなづく。

案内人 紀元前8世紀頃、この星座文化が貿易を通じてギリシャに渡りました。そしてギリシャ神話と結びついたのです。紀元前2世紀に活躍した天文学者・地理学者のプトレマイオスの『アルmageスト』という本がベストセラーとなり、そこに記された48星座は一つをのぞいてすべて残っています。ちなみにのぞかれたのはアルゴ座です。大帆船アルゴ号に由来する、大きな冒険船です。星座としてはあまりに大きかったのですが、今は4つに解体されて、りゅうこつ座、とも座、ほ座、らしんばん座となっています。もうない、幻の船です。その後も星座は増え続けたのですが、収拾がつかなくなり、1922年に、星座の数を88と決めました。

でも、今私たちの上には春の星座も冬の星座も北半球の星座も南半球の星座もごちゃごちゃになって存在してしまっている。ということは、どうしたらいいんでしょうか。まさか夜空を切り分けて正しい順番に並べるわけにもいきません。

佐藤 はい、さすがに編集できません。

一同、神妙にうなづく。

案内人 もしかしたら、言葉に閉じ込められた星座が、暴れているのかもしれないよ。もしくは幻のアルゴ号が、また名を取り戻したくてうずうずしているのかもしれない。

一同、驚きの表情を浮かべる。

案内人　でもそんな星々が暴れているのは、私たちが彼らに、星そのものとは別の魂を、与えてしまったからに過ぎません。私たちはつい、言葉の中に景色を閉じ込めてしまっています。そのことを忘れ、すべて雑然と並べて圧倒されると、また言葉に閉じ込める。その繰り返しです。

翠花　おやすみなさい。

三浦　おやすみなさい。

ミセス、すでに寝ている。

案内人　よい眠りにつきますように。

7、海への招待

三浦、翠花、ミセスブックママは眠りにについている。少しだけ窓が開いている。車窓からは朝のような光が差している。翠花の携帯電話が鳴り、起きる。翠花は電話をする。

翠花 ああ、うん。ありがとう。そうそう、ちよつと電車で田舎に行ってるんだけど。あ、そうそうカード。大丈夫そんなお金使わないから。え？ りいちゃんと眠れそう？ まだはしゃいでる？ ばあちゃん大好きだもんね、おけおけ。うん、大丈夫だと思うよ。(電車が止まる)。あれ、電車止まっちゃった。あ、海。あ、ううんなんでもない。じゃ、また。ありがとう。

電話を切る翠花。翠花の電話を聞き、いつの間にか眠りから覚めているミセス。翠花、誘われるように窓の方へ行く。

ミセス 海まで来ちゃったみたい。

翠花 え？

ミセス 海が見えるよね？

翠花 はい……。

ミセス あーあ、面倒くさいなあ。

翠花 何がですか？

ミセス 海は好きなんですけど、足についた砂を払うのが嫌いなんだよね。

翠花 わ、わかります。

ミセス 私、結婚してないし、子どももないんだけど、

翠花 はい。

ミセス 子ども育てるってどんな感じ？

翠花 いや、うーん、まあ面倒くさい感じはあるけど、

ミセス ええ、

翠花 あ、いや足についた砂を払う感じではなくて、

ミセス うん。

翠花 たとえばこう、砂利の中かなんか一生懸命とっても可愛い貝殻を探さなきゃいけないって、

ミセス うん。

翠花 しかも見つかるまで帰してもらえないみたいなの、そんな感じ？

ミセス へえ、ぜんぜんわからなかった。

翠花 あ、ですよねえ。「可愛い貝殻かあ、うわ、全然ねえな、うわあ、面倒くせ。なんだよ、誰だよ探せって言ったの、うわあ。でも可愛い貝殻なあ、大事なんだけどなあ。うわ面倒くせえなあ」みたいな。

ミセス うーん。

翠花 貝殻かあ。

ミセス もっと例えが上手い人に話を聞かなきゃなあ。

翠花 貝殻欲しいかなあ。

翠花、海の広がる窓の方へなんとなく歩いて行ってしまおう。

ミセス いいんじゃない？ ちょっとくらい。

翠花 いいですよね。

ミセス うん。タバコ吸う人っていつも一服したがるじゃない？

翠花 うんうん。

ミセス 一海（ひとウミ）みたいな。

翠花 ああ、いいですねえ、ひとウミ。

翠花 翠花、窓の外へ出て行く。

ミセス、見送りつつ、ぼうつとしている。

売りがやってくる。

売りが あれ、（電車が）止まっている。

売りが、路線図のようなものを取り出す。

売りが、三浦を起こしに行く。

売りが すみません、すみません。

三浦、起きてくる。

三浦 あれ……どうしたの？

売りが 電車が止まっちゃって。

三浦 え、本当？

売りが すみません、あたしも寝ちゃってて。確認してきて良いですか？

三浦 もちろん。

売子、別の車両の方へ行く。
すると、三浦の携帯が鳴る。慌てて出ようとする、車窓から佐藤が顔をだす。

三浦 うわあ！

佐藤 ごめん、びっくりした？

三浦 いやびっくりもなにも。

佐藤が携帯で電話していることに気付く。電話を構える三浦。

佐藤 原稿ありがとうね。

三浦 いえいえ、問題ないです。

佐藤 もう一件良いかな。

三浦 あ、今からですか？

佐藤 うん、これも急ぎ。

三浦 最後の、仕事ですか。

佐藤 一応、そうかな。いやでもバタついてて。なにせひとり飛んじやったからさ。

三浦 あ……はいやります。何分ですか？

佐藤 短いよ。30分のインタビューなんだけど、たいしたこと話してないから大丈夫。

三浦 ああ、はい、たぶん大丈夫です。

佐藤 上乘せしておくね。

三浦 いや、ありがたいです。

佐藤、三浦にテープを再生機ごと手渡しする。

電話を切る佐藤、窓から去っていく。三浦、テープを再生する、と、なかなか本番の音声にはたどりつかず、慌ただしく準備していたり、様々な雑音の入った音声が出てくる。三浦はどこが始まりの音声なのか聞きながら、その雑音に心誘われていくような感覚がある。

ミセス ねえ、今の佐藤さんでしょ？

三浦 あ、うん。

三浦は音声を止める。

ミセス よかった見つからなくて。

三浦 君はどうしたの？

ミセス 逃げてるの。

三浦 逃げてる？

ミセス 回収して不備を直してるところなんだけど、納品日に間に合わなそうで。
三浦 それは困ったな。

ミセス 投げ出して遊びに来ちゃった。

三浦 ああ。

ミセス 遊ぶことが何よりも重要だから。

三浦 そうか。

ミセス 秘密にしてね。話しかけなくて良いから。

三浦 わかった。

と、売りが帰ってくる。

売りが 電車、やっぱり迷っちゃったみたいで。今道確認してるんですけど。

三浦 電車って道に迷うんだ。

売りが ちょっと待ってて欲しいんです。大丈夫ですか？

三浦 待つのも何も、僕らここがどこかわからないから。

売りが すんません。あれ、お連れさん？

三浦 あれ？

売りが あれ？

三浦 翠花さん？

三浦、翠花の荷物が無いことに気が付く。

三浦 あれ？ あの（ミセスに）

ミセス 話しかけないでって言ったでしょう。

三浦、車内を見渡す。

売りが 午後になるまで発車できないと思います。

三浦 そっか。

売りが 一応、待っておくように車掌説得します。

三浦 ありがとうございます。

と、今度は佐藤が車内にいる。電話をかけている。

三浦 うわあ。

佐藤 文字起こしどう？

三浦 いや、さつきテープくださったばかりじゃないですか。
佐藤 急いでるんだよ。
三浦 いやいやいや。
佐藤 音聞いた？
三浦 いや、このテープ、音なかなか始まらなくて。
佐藤 ああ、いやもう、ちよつと待って。
三浦 え？
佐藤 いや、なんかもうストレスが。ああ、ちよつと……ああ！ で、え？ なんだっけ。
三浦 大丈夫ですか？
佐藤 え？ 大丈夫じゃなく見える？ 俺が？
三浦 いや、「ああ！」 って言ってたから。
佐藤 僕みたいなね、あの……乗り越えてきたんだよ、就職難を。
三浦 ああ、それは、はい。
佐藤 だから、あの、楽しくて仕方ないのね、もう。いや、今もう、この、状態が。
三浦 ええ、はい。
佐藤 仕事があるっていうね。
三浦 はい、それは、もう。
佐藤 向いてるっていうか。
三浦 それは本当に、そう思います。
佐藤 やりたいことやった方がいいって。
三浦 はい、ですよ、そう。
佐藤 だから、俺は、やりたいことやれてるんですよ、そうそう、そう……
三浦 ちよつと休んだ方が、
佐藤 休めますか？ 休めるんですか？
三浦 こ、こわ……
佐藤 ちよつと、もうテープ聴きながら行ってよ、聴きながら。
三浦 え？
佐藤 聴いて、歩いて、歩きながらも仕事して、電車でもやって、歩きながらでも……
三浦 いや、はいはい、わかりました、はい。

三浦、追われるように車外へ出て行く。

8、海はすべてを腐敗させる

三浦、テープを再生しながら歩いている。

音声1 だから、いや、でもここだけの話なんですけど、え、大丈夫ですか？（笑）

音声2 いや、載せない載せない（笑）しーってことで。

音声1 いや、だから元彼が、いたんですよ現場に。

音声2 ええ。ちよつとそれやばいじゃん（笑）

音声1 うん。で、え？ これ本当に言わないでもらえますか？

音声2 もちだよもち。

音声1 え、これ録音されてますよね。

音声2 カットする大丈夫大丈夫（笑）

音声1 えーじゃあ、そしたらなんか（笑）

三浦 なんだよこれ……。

聴きながら歩き、テープを止め文字に起こそうとし、諦め、また再生して歩く。

音声1 違うんです（笑）その、激ヤバ案件で、

音声2 え？

音声1 だから（耳打ち）、

音声2 え、まじやばーい（笑）

三浦、引き続き歩いていると、佐藤によく似た人物とすれ違う。眼鏡などをしている。

三浦 あ！

司書 ……え？

三浦 あ、いや？

司書 どうされました？。

三浦 いや、

先へ急ごうとする。と、売り子によく似た女性がやってくる。

後輩 先輩！

司書 どうした？
後輩 また書棚が一つだめになってしまいました。
司書 そうか。
三浦 ああ……

ふたり、去ろうとするところに三浦が声をかける。

三浦 あの、すみません。

ふたりは振り返る。

司書 はい？
三浦 僕のこと知らないですよ？
司書 (同時に) はい。
後輩 (同時に) はい。
三浦 あの、友達を探していて。
司書 ほう。どんな方ですか？
三浦 これくらいの髪の毛で。
司書 ほうほう。
三浦 で、こういう、帽子？ を被っていて。
司書 はい。
三浦 で、これくらいのスカートを履いていて。
司書 知らないな。
後輩 知らないですね。
三浦 ですよね。失礼しました。

三浦、去ろうとするが思い立ち、

三浦 ここってどこですか？
司書 はい？
三浦 あの……この辺り、まったく土地勘がなくて。
司書 ああ。
三浦 その……、あれ？ あれは、
司書 あ、そう小学校です。
三浦 ああ、小学校。小学校あるんですね。たとえばその、なんだろう、コンビニとか、
司書 私はその離れにある、図書館の司書です。

三浦 ああ、へえ。そうなんですか。その小学校というのは……この辺り、子どもは結構住んでいるんですか？ 人気がありませんでしたか？

海の音が聞こえてくる。三者、同時に周囲を見回す。

司書 今はもうあまり住んでいません。

三浦 そうでしたか。

司書 職業としてはあまり成立していませんね。

三浦 いや、聞いてしまつて申し訳ない。あの、コンビニは……

司書 ないですね。

後輩 ないです。

三浦 そうですよ。

司書 小学校のあたりまでできますか？

三浦 ああ、はい、え？

司書と後輩に誘導され、三浦、図書館の中へ入る。隙間風が吹いている。

三浦 ああ、図書館。

司書 はい。

三浦 なんかこう、スーパーとか……

司書 ないですね。

後輩 ないです。

三浦 ええ。

司書 すみません。

三浦 いや、こちらこそです。

問

三浦 かなり隙間風が……。

司書 うん。隙間をあらゆるもので埋めても、すぐ錆びてまた隙間ができるんです。

三浦 ほう。

司書 そこから潮風が吹き込んで、いつの間にか中まで錆びます。この土地は海を巻き込んだ風に吹かれ続けているんですよ。

三浦 ああ、なるほど……。

司書 すべてがものすごいスピードで腐食していくんです。

三浦 そうか……。

司書 私たちの図書館も、錆びていますし。
三浦 塩害というやつですか。
司書 そうですね。(後輩に)本を拭いていてください。
後輩 はい。

後輩、潮水にさらされた本を拭く。

三浦 それで、人が、
司書 ええ、住みづらいものですから。
後輩 救える本は救っているんです。手遅れになる前に拭いています。
三浦 そうか。

司書 海と本は相性が悪いでしょう。太陽とも相性が悪いです。日焼けします。紙は虫が食べますし、雨でも泥でもぐちゃぐちゃになってしまいますからね。
三浦 ええ。

司書 腐ったあと、本がよきによきと根っこから生えたりはしないし。
後輩 果物の種ではないですからね。
司書 夢いものです。

後輩 あるときなんて、ザザーン、と、波が本を搔つ攫っちゃいました。ひどい話でしょう。溶けて、ボロボロになっちゃったんですよ。

司書 ついつい後ろ暗くなってしまうな。何かいつも罪悪感があるんです。ごめんなさい
こんな話をお聞かせして。

三浦 海の街というのも、大変なんですね。

司書 ええ、まあ、かなり。

三浦 コンビニは、ないと。

司書 ないですね。

三浦 ないです。

司書、後輩、去って行く。

三浦は思案している。

と、カセットテープからまたもや声が聞こえてくる。

音声 もしもし、もしもし……

三浦 え、え!?

音声 もーしもし。

三浦 もしもし、

音声 海の街にいますか?

三浦 は、はいそうだと思います。

音声 すごい！ 繋がった！

三浦 どなたですか？

音声

人間の魂って見えない電磁波のようなものだと思っているので。その力を利用して、あなたのその機械に念を送ってみました。通じた！ 昔、飼ってたハムスターがね、亡くなってしまったんだけど、手で温めながら最後の最後まで看病していたら、途端にビビビと手のひらぜんぶに電流が走ったようになって。そのとき、ああ、魂って電気なんだなって思ったの。

三浦 あ、えっと、無線？

音声 私、その街で亡くなったの。

三浦 え、そうなんですわね。

音声 みて。そこに、トタンの家はある？

三浦 えっと、あ、うん一軒。

音声 私、そこに住んでいたの。そこから保育所にも、小学校にも通った。

三浦 そ、そうなんだ。

音声 入ってみてほしいな。まだ誰か住んでいるのか、みてみて欲しい。

三浦 いや、

音声 外からでもいいから。気になって成仏できないの。

三浦、恐る恐る覗き込む。

9、トタン屋根の家

トタンの主人、窓を開け顔を覗かせる。三浦と目が合う。

主人 ……。

三浦 あ、いや、すみません。

三浦、テープに向かって話しかける。

三浦 人、いましたけど。

テープから返事はない。

三浦 なんだよ。

主人 ……。

三浦 いや、ごめんなさい。違うんです。道に迷ったというか、あ、そうだ人を探してて。ん？ そうか普通に電話すればいいのか。ごめんなさい、本当なんでもないです。

三浦、翠花に電話をかける。と、レコーダーから声がする。

三浦 もしもし翠花さん。翠花さん。

音声 人いた！？

三浦 わ！

音声 人いたでしょ？

三浦 うん。

音声 どんな人だった？

三浦 うーん、おじいさん？

音声 そっか。

三浦 え、俺友達に電話かけたんだけど。

音声 電磁波のジャックってそんなに器用にできないから。

三浦 切るね。

三浦、再度電話をかける。と、街頭放送から声がする。

翠花 ああ、優和くん！？
三浦 え？ 街頭放送？ 翠花さん。どこいるの？
翠花 海のすぐそばまで来ちゃった。灯台が近くにある。
三浦 合流して電車に戻らないと。迎えに行くよ。
翠花 私も電車に戻るようにする。
三浦 場所はわかるの？
翠花 大丈夫！

電話が切れる。放送が鳴り止む。
と、トタンの主人が窓から三浦を見ている。

主人 今の放送、
三浦 え？ なんですか？
主人 今の放送は、迷子放送？
三浦 ああ、いや、友だちの……でもそんなところですかね。
主人 うん、懐かしい。
三浦 ああ、子どもが。
主人 子どもが迷子になることは、恐ろしいけれど、迷子になるほど子どもがいることは、豊かでもある。
三浦 ああ、はい。あの……、
主人 ……。
三浦 お腹、すいちゃって。本当にごめんなさい。今日……今日？ まだ……ピノシか食べてなくて。お金払うんで、あの、もし何かあったら。

主人、黙ったまま部屋を用意する。空間が主人の部屋になる。
三浦、質素なパンを手渡され、かじる。

三浦 うめえ。ありがとうございます。
主人 うまいか。はは。

外から海の音が聞こえる。
三浦、だんだんと奇妙な気になってくる。

三浦 ……あの、なんて言ったらいいかな、おじい……、お父さんは、お一人でここに？
主人 そうだな。
三浦 そうですか。

主人、ふと立ち上がり、音楽をかけに行く。ラジカセからレゲエが流れる。

三浦 ……ああ。レゲエ、好きなんですか。

主人 自分の愛する人生を生きろ、自分の生きる人生を愛せ。

三浦 あ、ボブ・マーリー。

主人、ボブ・マーリーに合わせて少し体を動かしている。

三浦 父も、よくボブ・マーリー聴いてました。

主人 そうか。

三浦 本当ちつとも家に帰ってこなくて、でも珍しく帰ってくるとボブ・マーリーばかりかけてるんで、パブロフの犬みたいに、条件反射？　なんか、姿が、見えてきちゃいますね。はは。

主人 そうか。

三浦 小さい頃は、「行かないで」ってよく泣いてました。

主人 そうか。

三浦 色んな珍しいお土産とか、山で拾ったものとか、魚とか、持って帰ってきてくれるんですけど、ぜんぜん嬉しくなくて。家にいて欲しかったから。

主人 そうか。

三浦、部屋を見て、

三浦 釣りもされるんですか？

主人 もちろん。最近は、なかなか魚が釣れなくなってるんだけど。

三浦 あ、そうなんですか。

主人 この街の海から、魚が減ってきている。

三浦 温暖化的な？

主人 そうかもしれません。

三浦 困っちゃいますね。

三浦、ふと思い出し、

三浦 ここは、以前誰か住んでいたんですか？

主人 どうして？

三浦 いやなんか、一人って感じがしない家で。温かみがあるっていうか。

主人 家族がいてな。
三浦 あ、そうですか。
主人 妹がいて。
三浦 ああ。
主人 肺炎をこじらせて、病院が間に合わなくて、亡くなってしまった。
三浦 そうでしたか。
主人 活発な子で、好奇心旺盛で、よく海に飛び込んだり、変なこと言ったり。
三浦 変なこと？
主人 魂は電気信号だと思っつて。それならそれで、電気を使って化けて出てくれたらいいのにと何回も。

と、レゲエミュージックがぶつりと途絶える。

音声 やほやほー。
三浦 え！？
音声 さっきはありがとうね。君のおかげでここへ入れた。電波のジャック難しい。
三浦 あ。
主人 ……ラジオかな？
三浦 えっと、
音声 お兄ちゃん。
主人 ……つるちゃん？
音声 無事おじいさんになれたみたいでよかった。人生ゲーム強いね！
主人 つるちゃん。
音声 私がこうして現れたのは、それは、あることを証明したかったからです！ 魂は電気信号だっつてね。
主人 ああ。
音声 もう変だとか嘘だとか言わせないよ。根に持ってます。
主人 根に持ってたのか。
音声 よし、現世の目標達成！ 成仏します。とはいえ私は私のシナプスを多少保持したまま生まれ変わる予定なので。お兄ちゃんもぜひシナプスを保持して、また次の機会で会いましょう！ じゃあね。

三浦と主人、顔を見合わせる。また、レゲエの音楽がかかってくる。

主人 珍しいことも、あるものだね。
三浦 本当に、そうですね。

主人 飯は、大丈夫かな。

三浦 はい、満たされました、ありがとうございます。

主人 はい。

三浦 え、なんですか、これ。

主人 お菓子。

三浦 お菓子。

主人 グミ、あの子が好きだった。

主人、去っていく。レゲエの音楽が止む。

三浦、一人取り残される。海の音が聞こえる。

三浦、グミを口にする。甘すぎる味に、顔をしかめる。

と、司書の後輩が現れる。

三浦 あ、先ほどは、

後輩 あ、はい。

三浦 ここは、

後輩 あれ？ 戻ってこられたんですか？

三浦 いや？（周囲を見渡す）いえ。

後輩が本を取りに去る。と、すぐに戻ってくる。

三浦 ……沙都子？

沙都子 なに？

三浦 なにしてるの？

沙都子 図書館の仕事だよ。

三浦 アメリカの？

沙都子 そう。

三浦 ここは海の街だけど。

沙都子 そうだね。旅好きだからさ。今は海の街がお気に入り。

三浦 そうか。あの…

沙都子 なに？ まだどっか行くなっているの？

三浦 そうじゃなくて。

沙都子 本当、じゃまばっかりしてくるよね。

三浦 そんなつもりはないよ。

沙都子、本を取りに戻る。と、今度は椅子に座る。かつて三浦と沙都子が暮らした、家のような空間になる。

沙都子 何かやろうとすると、いつもストッパーみたいに、

三浦 父さんみたいになっちゃうから。

沙都子 え？

三浦 似てんだからさ、本当に危ないから、

沙都子 楽しい？

三浦 え？

沙都子 それで楽しいって聞いてんの。

三浦 俺は、別に、楽しい。

沙都子 私は、楽しくない。

間

三浦 いや、だから、沙都子はとくに、なんて言ったらいいんだろう、女性なんだし、

沙都子 夢があるの。いっぱい世の中を見て、世界中のありとあらゆることを知って、知的で公平で視野が広い、良い世界をつくる人間になるの。

三浦 夢、

沙都子 そう、夢。

三浦 夢って。

沙都子 え？ 夢なんて毎日見るでしょ。

三浦 毎日は見えないよ。

沙都子 レイチエル・カーソンは世の中を変えた女性の一人です。

三浦 え？

沙都子 DDT殺虫剤の問題を『沈黙の春』で指摘したのが最も有名な功績だけどね。敵だらけになっても訴えることを辞めなかったんだよ。

三浦 ああ。

沙都子 父さんたまに読んでたでしょ。

三浦 ああ。

沙都子 でも私が愛読してるのは『センス・オブ・ワンダー』の方。

沙都子がさっそうと歩き出す。まるで幻想のようである。

沙都子 『センス・オブ・ワンダー』って遺作には、恨みがないんだよ。地球に生まれたことを愛せるような文学になっていてね。まるで言葉の中に自然が閉じ込められて

私たちの目の前に現れて、それがまた言葉からはみ出て溢れかえってるみたいなの。ただ、この本を書いている途中に、レイチェル・カーソンは亡くなってしまったの。だから、私たちがその続きをつくっていかなきやならないの。

三浦 え、

沙都子 だから、気を抜いてる暇はないの。

三浦 夢？

沙都子 夢じゃない、今読めるし今やっていけること。

沙都子、いなくなる。

そこへ入れ替わるようにミセスが現れる。

ミセス どこ行ってたの？

三浦 え！？ いや、本当に色々なことがあって。

ミセス なんか本読んだ？ 図書館へ行ったんでしよう？

三浦 そんな暇なかったよ。

ミセス もつたいないなあ。

三浦 ……翠花さんみた？

ミセス うーん、まだ貝殻拾ってるんだと思うけど。

ミセス、去る。

三浦、リュックからお茶を取り出し、飲む。もう一度、グミを食べる。

海に面对する。さまざまな海の音が聞こえてくる。灯台の明かりが見える。

三浦 翠花さーん。

三浦 いや、なんだろうな。遠く来たな。ここ遠いな。

三浦 本……でも読めばいいのかな。よくわかんないな。

三浦、庇いながらリュックから『センス・オブ・ワンダー』を取り出す。

三浦 「引き潮時に海辺におりていくと、胸いっぱい海辺の空気を吸い込むことができます。いろいろなにおいが混じり合った海辺の空気に包まれていると、海藻や魚、おかしな形をしていたり不思議な習性をもっている海の生きものたち、規則正しく満ち干をくりかえす潮、そして干潟の泥や岩の上の塩の結晶などが驚くほど鮮明に思い出されるのです」

翠花が現れる。

翠花 そんなところで本読んでたら、あつという間に紙がだめになっちゃうよ！

三浦 あ、翠花さん。

翠花 ごめん、貝殻拾ってた、りいに。

三浦 言っつてよ。

翠花 ごめん、思いつきで行動しちゃった。

三浦 ……そういうときも、あるか。

翠花 え？

三浦 そういうときも、ね、うん、あるよね。

翠花 さつきね、ここでカードを見ていたの。そしたら水飛沫が上がってきて。潮で体も

ペタペタするし。カードがダメになりそうので、すぐにしまったの。本もしまいなよ。

三浦 うん。

翠花 海を見ていたら、海のデッキが作りたくなった。

三浦 ああ、はは。

翠花 夏の渡り鳥のイソシギ、夜の海辺に現れるゴーストクラブ、砂浜に散らばるねじね

じしたルリガイのカード。

三浦 詳しい。

翠花 りいと一緒に図鑑見てるから。

三浦 ああ、いいね。

波の音が静かに聞こえる。

三浦 どうして電車に乗って、こんな遠くまで来てしまったんだろうと、思った。

翠花 カードを買いに来ただけなのにね。

灯台の灯りが、パチパチと変化して光る。水面に映る。ふたりはそれを見ている。

三浦 もしかしたらなんだけど、

翠花 うん？

三浦 すべて人工的なものは、僕らを助けるためにあるのかもしれない。

翠花 え？ どういうこと？

三浦 でもそれは自然なものと同様に繋がっていて。木や、鉱物からものを作るみたいに。目に見えない電気が、確実に存在しているように。

翠花 何言ってるの？

三浦 車窓から景色を追うと、歩いているときの何倍もの光景を見ることができるとい
いに。何か僕たちが作ったものや、名付けたものは、もつと遠くへ行くためにあつ
て、それによって僕たちはもつと色々なことに気持ちを向けることができる。
へえ。

三浦 でもなんのために、外に出るのか。なんのために、遠くへ。
うん。

三浦 なんのために、発展して、なんのために進化して。
うん。

三浦 滅びちゃえて、思った。
……うん。

三浦 でも、こうやって遠くまできてみると、綺麗だなと思う。
うん。

陽が落ちていく。

翠花 また夜が来そう。
三浦 うん。

三浦 「月はゆっくりと湾のむこうにかたむいてゆき、海はいちめん銀色の炎に包まれ
ました。その炎が、海岸の岩に埋まっている雲母のかけらを照らすと、無数のダイ
ヤモンドを散りばめたような光景があらわれました」

翠花 涼しいね。

三浦 あ、うん。涼しい。……お腹空いてない？

翠花 さっき買ったお菓子ぜんぶ食べちゃった。

三浦 あ、うんよかった。

翠花 電車に帰ろうか。

三浦 うん。

10、最後の電車

三浦、佐藤に電話している。電車には売り子、翠花、ミセスが乗っている。電車の走行音は相変わらず鳴っている。

三浦 はい、だからもう、めっちゃ頑張ったんで。いや、30分の音声90分かからないくらいで提出したんですから。もういいでしょう。え？ また次？ いや、もういい加減にしてくださいって。

翠花 大丈夫？

三浦 え？ じゃあ、もう……はいはいわかりました。僕が悪いです、はい、僕が悪いです！

翠花 ねえ、

三浦 はいはい！ じゃあやります、いやだからやりますって！

電話を切る三浦。

三浦 ああ、もう。

翠花 ねえ、大丈夫？ 無理しない方がいいんじゃない？

三浦 いや、もうこれ最後の仕事だから。

翠花 うん。

三浦 いや、もうね、最後だからね、感謝してね、仕事をね。はあ。

翠花 はは。

三浦 ってか仕事のつもりじゃなかったし。

翠花 え？

三浦 仕事のつもりじゃなかったんだよ。

翠花 はあ。

三浦 好きだったんだよ、普通に。

翠花 え？

三浦 普通に好きでやってたんだよ。

翠花 そっか。

三浦 キモイな。
翠花 え？
三浦 俺キモ。
翠花 ……大丈夫？

間

翠花 え、っつかクビになったの？
三浦 ああ……うん。
翠花 なに？ AIでいけるからって？
三浦 そう。
翠花 そりゃそうだな。

間

翠花 最近はね、AIもすごく嘘をつくんだよ。
三浦 ああ。
翠花 だから、そのせいで、あっちの会社もぐっちゃぐちゃになればいいのね。
三浦 はは、あはは。

電車が止まる。

売り子 到着しましたよ。終点です、「田舎のコンビニ前」。
翠花 え？
三浦 ああ、そっか。
売り子 降りますね？
翠花 はい。
三浦 はい。
売り子 じゃあ私はここまでで。
三浦 いや、ありがとう。
翠花 なんかちよっと寂しいな。
売り子 サービスで、お茶あげます。
翠花 え、いいの？ ありがとう。

翠花、売り子からお茶を受け取る。

翠花 相変わらずうちのメーカーじゃないな。

三浦もお茶を受け取る。

翠花 あ、でも俳句書いてある。

翠花、俳句を読む。

翠花 「じゃんけんで 負けて蛭に 生まれたの」

翠花 ……負け？

三浦 いや、負けではないんじゃない？

翠花 うーん。

三浦 いや、うん、なんか、光ってるし。

11、森の先にあるコンビニへ

三浦 電車を降りて、翠花さんとふたりで森を歩いた。コンビニまでは思ったより距離があり、夜中の森からは理解不能なさまざまな音が聞こえてきた。

森の事情に精通していたら、それがどんな生き物のどんな植物のどんな時間であるのか、まざまざとわかったことだろうと、思う。

翠花 針葉樹！ シダ。トナカイゴケ。ヤマモモ、コケモモ。モリツグミ。

三浦 意外なことに、コンビニは開いていた。木々の葉の隙間を掻い潜って光る、蛍光灯の人工的な灯りは、遠くからでもよくわかった。

コンビニの入場音が流れる。

店員 いらっしやいませ。う、うん（喉を鳴らす）

翠花 ああ、

店員 いや、もう本当ウイルスはないんですけど、ちょっとまだ喉が治りきってなくて

翠花 噂はやっぱり本当だったんだ。

翠花、レジ前に行く。

翠花 あの、カードのバックって……

店員 ああ、まだまだめっちゃありますよ。

翠花 きゃー！ ぜんぶください！

店員 どうぞどうぞ。

翠花、渡されたバックを次々開けていく。

三浦 ああ、なんかもう。

翠花 あ、レアじゃん！ ちょっと待って！

翠花、デッキを取り出し、組み合わせる。

翠花 え、これめっちゃいい！ 絶対強いんだけど。

三浦 え、ちょっと待って、これ俺も使っていない？
翠花 どれ？ ああ、それならぜんぜんいいあげる。
三浦 あ、うん。よし。

三浦もデッキを鞆から取り出し組み立てる。

翠花 やばい、早くバトルしたいなあ。

三浦 俺のデッキもかなり良い線いってるはず。

翠花 え、やる？

と、コンビニの入場音が鳴る。息を切らした佐藤が入ってくる。

佐藤 あの、バックまだありますか？

三浦 佐藤さん！？

翠花 え？ 誰？

佐藤 三浦くん、何やってんの？

三浦 佐藤さんこそ。

佐藤 さっきの音源まだ起こしてないよね？

三浦 いや、さっきもらったばかりですから。まじで。え、何やってんすか？

佐藤 だから、仕事があり、仕事があり、仕事があり、仕事があり、仕事があり、仕事があり、休暇があるという。

人に頼んでおいて、自分は。

佐藤 うるさいなあああ！ それね、君ね、死ねって言ってるようなもんだからね。

翠花 おお、ちょっと言葉が、

佐藤 ダメだからね、それ。

三浦 ああ、もう、ええっと、はい、じゃああれですか。

佐藤 なに。

三浦 パック買いに来たんすね。

佐藤 そうだ。

三浦 へえ、じゃあ、今デッキ持ってんすか。

佐藤 ああ、まあ、うん。

三浦 勝負しませんか。

佐藤 え？

三浦 バトルしませんか。

佐藤 ええ、まあ、良いですよ。

三浦と佐藤、デッキとデッキマットを取り出し、並べていく。

翠花 お、良いじゃん良いじゃん。えー、めっちゃワクワクするわ。

三浦 じゃあ、先攻後攻決めましょう。

佐藤 うん。

コインを投げ、手の甲で受ける。

三浦 表？ 裏？

佐藤 ……裏。

三浦 ではよろしくお願いします。

佐藤 よろしくお願いします。

バトルを始めるふたり。使用したカードの内容等をゲームルールに沿いながら口に出し、対戦をしている。

三浦 俄然、俺の方が強かった！ やっぱり仕事人間ってバトルは弱いよなあ。うわ、すげえ、本当数ターンで倒せそう。家でコツコツだけど修行してきてよかった。え、俺って思ったよりすごくない！？ 強くない！？ やっぱ人見知りとか言ってるな。いで大会でちやおうかな。デッキ強化すべきだから、奮発して新しいカード数枚買う！？ にしても勝つのがって気持ち良い……なんて思っていたら、

バトルをする手を止める三浦と佐藤。

三浦 まず、俺のカードがだんだんとふにゃふにゃしてきて、いや、スリーブに入れてたはずだったんだけど、いつの間にか、なんていうんだろう、腐食していった、

佐藤、呆気に取られている。

三浦 そしたら佐藤さんのカードも、俺のが移ったみたいにとんどんふにゃふにゃしていった、結局なんかかなりカード自体ダメになってしまっ、翠花さんが、

翠花 ああ、きつとさっきの海で潮風にさらされたからだね。

三浦 と、言った。なんか、俺には、俺たちには、まだ戦いは早かったらしい。早かった

っていうか、まあもう戦えないんだなって思って少し悲しい気持ちはしたけど。じゃあ、こんなふうにして戦いが終わることを、たしかに望んでいなくはないなと、思った。かなり変な気持ちにはなったけど、すっきりはした。佐藤さんとは、

三浦 ありがとうございます。

佐藤 ありがとうございます。

三浦

と、まあ礼儀正しく挨拶して、形式上は公式ルール通りに終わらせることができた。店員さんは端っこで寝てたけど、終わる頃に起きてきて、閉店する、と言った。今が何時だか、まったくわからなかった。ここがどこだかもわからなかったし、どうやって帰ったのかもわからなかった。でもたぶん、電車で帰ったんだと思う。

店員が去り、佐藤が去る。翠花も去り、三浦はひとり取り残される。いつの間にかアパートに戻っている。

12、ふたたび三浦のアパート

三浦、アパートにいる。窓は開いている。

三浦は最後の文字起こしをしている。

音声 私はひとり書き物をしながら、なぜ自分は何を書くのだろうと自問していました。私のこしらえる物語は、出来損ないで、決着がつかず……何だってこんなものと思ったものです。(相槌 ええ) しかし我が主人公には、物語という彼なりのやり方ですか、手立てがなかったのです。本作は同じ一つの世界の中で、生者に会い、死者に会いますが、そこに出てくる人々、事物、場所は、わたしが愛し、わたしを愛してくれた人々に捧げるオマージュであるのです。このレクイエムにはレクイエムとしての厳粛さが……

ふと棚を見ると、ミセスブックママのぬいぐるみが置いてある。少し驚く三浦。
と、ミセスブックママが現れる。

ミセス 今、何時？

三浦 おお。いや、ちょっと待って。

ミセス 電車が走ってるから、朝5時から夜12時までの間かあ。

三浦 ま、そうだね。

ミセス 結局ね、不備がある気がしてたんだけど、

三浦 うん。

ミセス わからなかったの。

三浦 あ、そうなの？

ミセス あると思えば見つかってしまうし、ないと思えばないし。

三浦 ああ。

ミセス だから、またこうして戻して歩いてるんだよね。

三浦 そうなんだ。

ミセス 十分遊んだから。もうそれほどにはつらくないっていうか。戻す作業も別に。

三浦 うんうん。

ミセス 名前も変えてもらおうと思ったんだけど、

三浦 ああ、うん。

ミセス もう事実かどうかはどうでもいいかなって。だってみんなにミセスブックママで覚えてもらってしまったし。

三浦 ああ。

ミセス お名前もね、お名前遊びだと思えば。

三浦 お名前遊び？
ミセス 別に音の響きは良いわけだし。ミセスブックママ。
三浦 ミセスブックママ。

ミセス、去っていく。
と、インターフォンが鳴る。扉を開ける。と、そこには沙都子がいる。

三浦 おお、沙都子。

沙都子 やっほー。お兄ちゃん元気してた？ ほい、これお土産。

三浦 ああ、うんありがとう。

沙都子 今、ちょうど日本に帰ってきてきて。寄っちゃった。

三浦 ああ、そうなんだ。

沙都子 突然来たのに、怒らないんだ。

三浦 まあ。

沙都子 相変わらずの部屋だね。

三浦 え？

沙都子 何の変哲もなく。

三浦 ごめんって。

沙都子 ねね、父さんが新種の植物見つけたって騒いだことあったじゃん？ 覚えてる？

三浦 あ……、

沙都子 ほら、クライミングで死にかけてときに、偶然見つけたって。すごい嬉しそうだったでしょ死にかけてわりに。いつ頃だっけ、お兄ちゃんが中学か高校か……

三浦 あ、あったね。

沙都子 そのこと、最近急に思い出してさあ。教授に話したの。そしたら見せてってさ。

三浦 え、すごいね。

沙都子 ね！ やっぱり日本の山の話は海外で食いつきいいわ。鼻高い。植物標本を実家から送ろうと思って。

三浦 ああ、そういうこと。

沙都子 本当に新種だったら、あたしが名付けて良いって。

三浦 え、おお。

沙都子 へへ、どんな名前がいいかな。

三浦 教えてよ、名前つけたら。

沙都子 うん。生きてるうちに、やってあげたかったけど。ま、でも山で死ねたら本望って言うってなし。

三浦 うん、まあ、ね。

沙都子 そうだ、五回忌。

三浦 え？

沙都子 ちよつと三回でも七回でもなく……だけどき、やろうね。合わせてこつち帰ってくるから連絡するわ。

三浦 うん、わかった。

沙都子 ボブ・マリーー流すか、五回忌は。

三浦 はは。いいね。

沙都子 じゃね。またまた。

三浦 うん、気をつけて。

沙都子、帰っていく。

三浦、沙都子のお土産の中身を確認する。かなり甘そうなアメリカ産のジュース、もしくはお菓子。

三浦、仕事に戻ろうとする。と、今度は翠花が現れる。

翠花 ごめんください！

三浦 翠花さん？

翠花 ばあちゃん見送って、りいは今スイミングやってる。ここ近いからさ。

三浦 ああ、習ってるんだったね。

翠花 いやあ、りい楽しそうだったよ。何食べさせてもらったの？ って聞いたら、お菓子！ って。子どもって正直だよ。ばあちゃんも甘いしさ。

三浦 はは、よかった。

翠花 あ、でもね、りいが読書に目覚めたって。私がない間、ずっと本読んでたらしい。

三浦 あ、へえ。

翠花 どうせ捨てるでしょ？ それ。

翠花がミセスブックママを指差す。

翠花 ちようだい！

三浦 え？ ああ、いいよ。

翠花 はは、ありがとう。

翠花、手に取る。

翠花 っていうのは冗談で。いや、冗談じゃないんだけど。本当にもらっていい？

三浦 え？ うん。

翠花　すごく楽しかったから。遠出して。

三浦　そうだね。

翠花　滅びちゃえって、思ってる？

三浦　……いや、

翠花　まるで冒険だったね。また行きたい。

三浦　いつも、どこも行かないのにね。

翠花　ね、いつもはどこも行かないのに。

ふたりの間に、電車の走行音が聞こえたような気がする。実際には走っていない。

三浦　またいつか、どこか、遠くへ行く。きっとそうするつもりだ。

終

参考文献

引用

- ・レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』訳上遠恵子 佑学社 1991年
本文中に鈎括弧付きで引用。

- ・池田澄子 俳句「じゃんけんで 負けて蛍に生まれたの」
本文 p55 にて引用。

典拠

- ・山極寿一『共感革命 社交する人類の進化と未来』河出書房新社、2003年
 - ・ヴァージニア・ウルフ『新装版 ある作家の日記』訳神谷美恵子 河出書房新社、2016年
 - ・永田美絵『天体のふしぎがわかる 星と星座の図鑑』大和書房 2023年
 - ・アントニオ・タブッキ『レクイエム』訳鈴木昭裕 白水Uブックス 1999年
- 文字起こし音源、星座解説部分において、参照した資料が右記です。